

1 古文の仮名遣いを知ろう

現在私たちが日常使っていることを「口語(口語文)」といい、主に江戸時代まで文章として使われたことを「文語(文語文)」といいます。

これから学習する「古文」は、「歴史的仮名遣い」と呼ばれる表記によって書かれており、平安時代中期にできた形が基本になっています。

A いろはにほへと ちりぬるを わかよ たれそ つねならむ
 B イロワニオエト チリヌルオ ワカヨ タレソ ツネナラン
 C 色 は匂 へど 散りぬるを 我が世 誰ぞ 常 ならむ



うみのおくやま けふ こえて あさきゆめみし ゑひもせす
 ウイノオクヤマ キョー コエテ アサキユメミシ エイモセス
 有為の奥山 今日 越えて 浅き 夢 見じ 酔ひもせず

A: 歴史的仮名遣いで書いたもの(古典の原文)。B: 音読の通りに書いたもの。C: 意味がわかるように漢字仮名まじりで書いたもの。

1 右のAとBとを比べて仮名遣いが異なっている部分を抜き出そう。例は↓ワ

ほ	↓			
↓		けふ	↓	
		↓		↓
				↓

2 右ページ下段の五十音図(文語)を完成させよう。

3 傍線部に注意して、本文の右の空欄に、音読する通りにカタカナで書いてみよう。

①今は むかし 竹取りの 翁と ※いふ もの ありけり。
 オキナト

②野山に まじりて 竹を 取りつつ よろづの ことに 使ひけり。
 ミヤツコト

③名をば さかきの 造と※なむ いひける。

④その 竹の 中に もと 光る 竹なむ ひとすぢ ありける。

⑤あやしがりて 寄りて 見るに 筒の 中 光りたり。

⑥それを 見れば 三寸ばかりなる 人 いと うつくしうて あたり。

サンズン

『竹取物語』

ヒント

- ① ※単語の語末の「ふ」は「ウ」と音読するので、「いふ」は「イウ」と母音が続くよ。
- ③ ※「なむ」で助詞。④の「なむ」も同じ。

チャレンジー すらすら読めるまで、何度も音読してみよう。

五十音図(文語)

ナ行	タ行	サ行	カ行	ア行	行段
な	た	さ	か	あ	ア段
に	ち	し	き		イ段
ぬ	つ	す	く		ウ段
ね	て	せ	け		エ段
の	と	そ	こ		オ段
ワ行	ラ行	ヤ行	マ行	ハ行	行段
	ら		ま		ア段
	り		み		イ段
	る		む		ウ段
	ろ		め		エ段
			も		オ段

「歴史的仮名遣い」を音読するときの決まり

- 単語の語中・語末にある「ハ行」(はひふへほ)は「ワ行」(ワイウエオ)で音読します。
- 助動詞・助詞の「む」は「ン」と音読します。(P.18)
- 次のように、母音が続く場合は長音で読みます。
 ・アウ(ア)→ウ(ウ) ・イウ(イ)→ウ(ウ) ・エウ(エ)→ウ(ウ) ・オウ(オ)→ウ(ウ)
- 「ワ行」の「る」は「イ」、「ゑ」は「エ」と音読します。

(5)「タ行」の「ち」は「シ」、「つ」は「ズ」と音読します。

口語訳

- 今となつては昔のことだが、竹取りの翁という人がたそうだ。
- 野山に分け入って竹を取っては、いろいろなものを作るのに使っていたそうさ。
- (おじいさんの)名前はさかきの造と云った。
- (おじいさんが取っている)その竹の中に、(なんと)根元が光っている竹が一本あった。
- 不思議に思つて近寄つて見ると、竹筒の中が光っている。
- それ(その竹筒の中)を見てみると、三寸ぐらいの人が、たいそうかわいらしい姿ですわっている。

